

戦後岐阜の引揚者集団における住宅開発

—ヤミ市から産業集積への一過程—

根岸 秀行

Repatriates in Post-War Gifu City and Housing Development

—Transition Process From Black Market to Agglomeration—

Hideyuki NEGISHI

Abstract

The black market in Gifu city was constructed in 1946 by the miserable repatriates who were led by able but too characteristic leader. Growing up their apparel transaction, they became confident. Then after expelling their leader who forced them to the disgusted housing business, they started pursuing their apparel business and turned to business persons. Through this process, they were reintegrated to their mother country.

キーワード：集積，ヤミ市，引揚，住宅開発，再統合

keywords：agglomeration, black market, repatriation, housing development, reintegration

I 問題関心と課題設定

1. 問題関心

産業集積と経路依存

産業集積 agglomeration は、地域社会の経済的基盤となり得るものであり、途上国はもちろん地方人口の減少に悩むわが国のような成熟国において、その意義は増大している¹⁾。

しかし、例えば橋川武郎によると、その集積が何故にそのタイミングでその地域社会に形成されたか、という集積形成に至る動態分析は十分ではなく、この形成メカニズムに関する研究の蓄積が求められている²⁾。

その際に留意すべき概念が、「経路依存」である³⁾。どのような過程を経てその集積が形成されたか、この差異がそれぞれの集積に属する中小企業群のその後の行動を大きく左右し、この行動の差異はその集積の存続とともにその所在する地域社会の持続可能性をも左右することになる。

橋川の「その集積は、何故にそのタイミングで、その地域社会に形成されたのか」という問いかけにこの「経路依存」の観点を加味すれば、次の様に言い換えることができるだろう。

「その集積は、いかなる経緯によって、そのタイミングで、その地域社会に形成され、これがそ

の後どのような影響をもたらし、現在にいたるのか？」

それゆえ例えば、アジア太平洋戦争の敗北という重要な転換点を契機に形成された産業集積を分析する際には、明らかに、敗戦がその形成にいかに関わったかを考慮する必要がある。

これは、日本の現状（社会と経済，企業経営）を理解するための発生史的学問である日本経済史・経営史⁴⁾が、敗戦をきっかけとする財閥解体や経営者ページを分析対象とするのと同通する。

戦後復興と帰還移民の日本への定着

しかし同じ重要な転換点にありながら、財閥解体などと異なり、敗戦後わずか数年間に、旧満州や植民地、海外占領地域などから、帰還移民＝引揚者310万人、旧軍隊の復員者400万人、あわせて人口の1割に及ぶ無業者が、政治的、経済的、そして社会的混乱の渦中にあった日本社会（中央，地方）社会に定着していった事実、すなわち戦後復興の過程で再統合 reintegration された事実が顧みられることは少なかった⁵⁾。引揚者に関する研究は引揚過程そのものに偏りがちで、帰国後の彼らが各地域の戦後復興に、労働力や経営資源として及ぼした影響に関する研究は乏しい⁶⁾。

岐阜アパレル産地と引揚者ヤミ市

岐阜県岐阜市を拠点とする岐阜アパレル産地は、

第二次大戦後の大陸引揚者による岐阜駅前ヤミ市を出発点とし、同業者組織「問屋町連合会」に結集することで発展した。1970年代には製造卸問屋数1,500、縫製業者数4,000、東京、大阪に次ぐ出荷額を誇った産地型産業集積である。

この集積につき筆者は前稿において、戦後経済統制期の1946（昭和21）年11月に誕生した岐阜駅前ヤミ市「ハルピン街」が、統制解除期の1951年に岐阜駅前「問屋町」に衣替えする経緯について検討し、両者は衣料取引という点で連続するものの、生存のための「生業」（なりわい）からビジネス＝「事業」へという決定的な違いがあり、後者への変化がアパレル産地に飛躍するカギであったことを展望した⁷⁾。

2. 課題の設定と方法

本稿は、日本のアジア太平洋戦争敗北後という特殊かつ重要な一時期に形成された産業集積を、敗戦を象徴する引揚者＝帰還移民の戦後復興期における定着＝再統合過程と重ね合わせ、統一的に把握する試みである。

具体的には、引揚者集団が岐阜駅前に形成したヤミ市、通称ハルピン街において、衣料取引と並行して引揚者リーダーが推進した「住宅開発」事業に焦点をあてる。この事業への対応を、引揚者集団の社会関係の変容、および衣料取引の「生業」からの脱皮＝本格的「事業」化と関連づけて解明し、後の岐阜アパレル産地につながる変化の芽を明らかにしたい。

中心的な対象時期は、岐阜駅前ヤミ市ハルピン街が成立する1946年11月末から、その解体と引揚者リーダーの逮捕を含む1950年末までの約4年間とする。

分析に際しては、行政資料、業界誌、新聞などの文書資料とともに、ハルピン街当事者から採取した証言記録を多用する。彼らにとってハルピン街の営業は経済統制に違反したヤミ商売で規模も零細であるため、当然ながら文字資料は乏しく、多くを語ってはくれない。本稿はオーラルヒストリーの手法による当事者の記憶＝証言の記録化により、「能動的に」文字資料の欠落部分を補う試みでもある⁸⁾。

なお、本稿は、適宜、年表を参照しつつ論を進める。同表には、A列（年表-Aと表記。以下同じ）に引揚者リーダーである高井勇（Ⅲの2.で詳述）

の行動、B列に彼に主導されたハルピン街の衣料営業、これと並行してすすめられた岐阜県内・外における住宅開発事業の様相をC列とD列に、前著所収の各資料（地元新聞や業界誌に収載されたハルピン街当事者の証言等）、関連書籍、筆者らのヒアリング記録からまとめたもので、行論とできる限り照応するよう下線やゴシックを付した⁹⁾。

Ⅱ 住宅群としての岐阜駅前ハルピン街

1. ハルピン街の概要

岐阜県岐阜市は第二次大戦の末、1945（昭和20）年7月9日の空襲によって中心部に壊滅的打撃をこうむりながら、敗戦後、日本有数のアパレル産地に成長することに成功した。この産地化の出発点に置かれるのが、焼け跡の広がる岐阜駅前広場に大陸からの引揚者の一群が形成したヤミ市、通称「ハルピン街」であった¹⁰⁾。彼ら引揚者そしてその家族は、「絶対的貧困」状態にあったから、生存の確保つまり自分と家族の衣・食・住の確保が至上命題であった。そしてハルピン街こそ、彼ら引揚者に、住まいとヤミ商人としての当面の仕事を与えてくれる場であった。

年表-Cのとおり、ハルピン街は1946年11月末に建設され、1950年7月に解体された住宅兼用店舗群である。そこで、「北満引揚民商場」としてヤミ営業が開始されたのは、年表-Bのとおり1946年12月初めのことであった。

このハルピン街は、リーダー高井勇の親衛隊ともいべき「青年隊」（後述Ⅲ）が岐阜駅前広場を無断占拠し、金華山から盗伐した木材で建設した2階建て14戸の長屋である（年表-C、1946年）。住宅兼用店舗とはいってもバラック建で本格的建築からは程遠く、一軒当たりの建坪も平均1.5坪に過ぎなかった。

しかし、ハルピン街の立上げ以降、軒数＝入居者数は、次のとおり順調に増加した（年表-C）。

1946年11月 — 14戸

1947年7月 [古着商＝衣料取引集団に転業時]
—34戸以上（60戸とも）

1948年初 —120戸

1950年7月 [大ハルピン街・更生住宅に移転時],
—149戸（実数）

増加数は、1946年末の立上げからの半年で2倍

年表 岐阜駅前ハルピン街の動向：リーダー、営業内容、住宅開発（1946－1995）

年	月	A:リーダー高井勇	B:ハルピン街の営業	住宅開発	
				C:ハルピン街	D:大ハルピン街ほか
1946 (昭和21)	4	* 政府:25日、次官会議「定着地に於ける海外引揚者援護要綱」で、都道府県・地方事務所・支庁・市町村役場内に「引揚者の自主的活動を促す—引揚者の発意に基づく互助的各種援護団体」おき、相互に調整連絡をはからせる			
	6	* 岐阜市: 戦災復興土地区画整理事業(駅前強制疎開地の再利用計画)			
	8	旧満州国ハルピンから、「青年隊」とともに出発。高井より、 帰国後の共同事業発言 。			
	10	13日、 高井勇一家5人、岐阜駅に到着 。20日朝、「 青年隊 」が 岐阜駅に連れて到着 、高井が出迎え、 預けた資金受取る 。			
	11	26・28日、岐阜新聞にハルピン引揚者大会の広告参照⇒C。 29日、 同大会主催、「北滿地区引揚民更生社」結成		26日、高井・「青年隊」、金華山国有林の木材を無断伐採、 岐阜駅前にバラック2棟14戸完成、左の「更生社」加入の引揚者(入居金2,000円)入居 。	
	12		「北滿引揚民商場」(通称ハルピン街)で飲食サービス中心。当初、7割が飲食関係—おでん、ロシア料理、やきいも、うどん	引き続き、建設と受入れ。 戦災復興院岐阜建築所出張所長の抗議	
1947	1			「青年隊」の作業で、L字形に 10 戸増築	
	3	参照⇒D			⇒14日、岐阜市公会堂で、 住宅(大ハルピン街3,000戸)の建設計画発表
	5				5月頃(春か)、大ハルピン街建設準備作業。「青年隊」、ハルピン街住民の労働提供。
	6	この頃、古着商への集団転業を計画。岐阜市警より「古物商」鑑札100枚以上取得			6月末、140戸分の長屋(1棟木造2階建て8～10戸)完成
	7	* 政府:1日、食糧緊急措置令・飲食営業緊急措置令公布	5日、 34名で「古着商」屋に集団転業 、以後拡大。実質は新品服地・衣類のヤミ取引	→ 34戸以上	大ハルピン街建設中に、 瀬戸、名古屋、東京の赤羽で同様の住宅建設
	11	11-12日、引揚者スケッチ展(東岐阜市長が来場)		この頃、 全60戸 「引揚者スケッチ展」会場として西側拡張。やがて、 100戸超	翌23年1月19日までの間、「青年隊」ハルピン街住民の労働提供により新橋駅裏に見本住宅(八軒長屋)を建設
1948	1	参照⇒D	一宮、羽島より布仕入れ、 既製服製造 も行う。 セリ市に客が集まり、盛況 この頃から、 取引好調。「一尺巻り(札束を揉む)」が噂される。	この頃、 全120戸	⇒19日、 東京日比谷公会堂で「住宅獲得大会」 。全国住宅建設協同組合設立。新橋駅の見本住宅で1口10,000円で入居申込み受付
	10	ハルピン街代表として 教育委員選挙 に、川村一正を出馬させる。3万票得るも落選			
	11	10日、岐阜地検・岐阜市警察、「大ハルピン街住宅組合」事務所捜索。「ハルピン街事務所及び組合長」 高井を逮捕、収監 。 21日、臨時物資需給調整法違反等で 起訴 月末、服地横流し代金が大ハルピン街など 引揚者、戦災者用住宅建設費であったとして仮釈放 。		→ ハルピン街住民ら、高井の釈放を陳情 。	
1949	7	* 厚生省・岐阜市:ハルピン街の強制移転を計画			
	秋				この頃、「ほぼ完成」。住民300人
1950	12	引揚者用の更生物資であるコルテン横流し	この頃、 全住民が全国を行商、岐阜商品の廉価さが評判を取る		
	*経済統制が事実上なくなる				
	3	この年、 更生住宅の配分 について青年隊(8名)と軋轢、詳細不明			
	7		営業を停止する	撤去 30日、 ハルピン街全149戸が駅西方の大ハルピン街等に移転	国などと、大ハルピン街近傍に、更生住宅(小振りの木造2階建て)建設の交渉妥結
1951	4	▲この頃、反高井勇派の高木保郎ら「 岐阜問屋町建設会 」を結成			
	12	▲岐阜織維問屋町連合会結成。初の「歳末、冬の大売り出し」			元ハルピン街住民の一部、 岐阜駅前マルファジ織維街(117社)建設 。 以後、 1952年にかけて、五月雨式に駅前回帰し織維街建設運動 。

大ハルピン街の建設作業

?(竣工時期不詳)

(依拠資料) 蘭信三『引揚援護の記録』解説』『引揚援護の記録』3巻、クレス出版。前掲『岐阜アパレル産地の形成』、『岐阜既製服産業発展史』、『特殊物件の栞』(岐阜県歴史資料館所蔵『長谷川ふみ家文書』)、『増補戦後日本経済政策史年表』勁草書房、合田昭二『岐阜織物史』岐阜織物工業協同組合、各ヒアリング記録(筆者実施)など。

以上、1947年7月からの1948年初めまでの半年が2倍と、開設から1年2ヶ月間のペースはきわめて急速であった。

そして1950年7月、岐阜市の移転要請に応じてようやくハルピン街が解体される前後、住民の多くは引揚者・戦災者用住宅として建てられつつあった大ハルピン街および更生住宅に五月雨式に移転し、衣料営業を継続していた¹¹⁾。

2. 敗戦後、岐阜県の住宅問題

岐阜駅前ハルピン街は、住宅と商売兼用のバラックから成るヤミ市である。引揚者らはこのバラックを居住先に求めて住民となり、そのままヤミ商人となったわけである。彼らが、たとえバラックであっても入居を熱望せざるを得なかった背景には、敗戦直後の住宅難があった。

第二次大戦後、岐阜県にも大量の人口が流入した。『岐阜県史 通史編』によると¹²⁾、1945年末に126万人余であった県人口は、わずか1年後の1945年11月には一挙に2割以上増加して151万人余となった。この異常な人口増加は、その後の1950～1960年期、1960～1970年期の伸びがそれぞれ6%、7%程度にとどまったのとは対照的である。こうした人口増の主たる要因となったのは、海外からの引揚者、復員者の流入であった。1948年時点で、引揚者は1万5,864戸におよび、これは他府県からの転入者約9,800戸を大幅に上回っていた。

ちょうどハルピン街ヤミ市が立ち上がった1946年12月、岐阜県教育民生部による住宅状況報告はその状況を次のように報告する¹³⁾。

「引揚者へ当住宅用資材配給申請に就いて案一

教育民生部長より経済部長宛

終戦以来、海外より本県に引揚たものは12,000世帯35,000余人を算へ、それぞれ縁故知己に落着き一応の生活はして居るが、此の中住居の供与を必要とする者約900世帯と見做され、その需□度に依り各地域毎に収容施設を、別紙計画に基づいて設置を急いでいるが、所要資材入手困難の為、施設管理が遅延する恐れがあるので、左記資材配給方配慮煩わし度い。

(中 略)

一 住宅必要戸数 (住宅なき者の数)

(1) 戦災及び強制疎開による住宅喪失数

21,894戸、

戦災者にして現住者

(2) 引揚者にして住宅なき者の数、800戸、

21年12月1日以降

(3) 震災により住宅を喪失した数、320戸

(4) 合計、住宅喪失数23,014戸、

住宅復興数11,195戸

(5) 差引不足数 11,819戸、12月25日現在

二 建築進捗中又は計画中の住宅

(1) 一般各自による、2,000戸、

建築許可令による

(2) 公共団体において建築進捗中、300戸

(3) 引揚者越冬住宅緊急対策による、904戸

合計、3,204戸」

(下線筆者。なお、アラビア数字に直す)

引揚げいまだ半ば、1946年末の厳冬期、岐阜県の「引揚者にして住宅なき者の数」は800戸(12月1日以降)であり、戦災、強制疎開、震災で住宅を失った者全体では不足数11,819戸に上った。衣・食とともに、住もまた全く不足していたのである。

III ハルピン街の社会構成と高井勇

ハルピン街に入居した引揚者たちは、混乱した日本社会で生き抜くために、この街のバラックに住まいを求めざるを得なかった人々であった。結果として彼らは、受け入れてくれた高井勇をリーダーとする引揚者集団に属し、彼の指示のもと、ヤミ商人として違法取引に携わることとなった。

1. ハルピン街住民の社会構成

ハルピン街の住民の多くは、大陸などから引揚げてきた家族持ちの無業者であった。元の職種は商店や行政、教育機関に所属する給料取りであり、農業開拓団員は「青年隊」を除きほとんど見当たらない。生活基盤を丸ごと大陸に残してきた彼らは平等に貧しく、高井勇の提案(=2,000円で住宅兼用店舗に入居できる代わりに経済統制品を無許可で取引するヤミ商人となる)を受け入れることで、ようやく、生活の基盤をこの街に見出すことができた。

ハルピン街住民の中心が彼らであることは、数的には明らかであった。しかし、ハルピン街という社会は、彼らだけで構成されていたわけではない。入

居時の経緯からこれをグループ分けすると、ほぼ次のようになるだろう¹⁴⁾。

中核グループ：

リーダー高井勇（1912(明治45)～1990(平成2))と、川村一正ら側近数名。

比較的年長（30歳代）でハルピン街設立に関わった引揚者を中心とする。彼らは引揚者用配給物資の受け皿である「北満地区引揚民更生社」（1946(昭和21)年11月発足。年表-A)の幹部であり、ハルピン街における諸活動の司令塔であった。高井の進める住宅開発の責任者として、名古屋や東京などにも派遣された。

一般引揚者グループ：

おもに、ハルピン街開業後に住民となった引揚者たち多数。

旧満州だけではなく朝鮮や台湾引揚者中心だが、内地被災者を含む。ヤミ市の衣料営業の実働部隊であり、同街が解体される1950年半ばの149戸の大半を占めたとみられる。

彼らは居住と引き換えに北満地区引揚民更生社員となることを義務付けられ、また、自分の衣料営業だけでなく、大ハルピン街や東京の住宅建設などリーダーの指示する諸々の活動に動員された。

「青年隊」グループ：

敗戦後、旧満州国哈爾濱（ハルピン）に落ち延び、そこで世話になった高井勇とともに引き揚げてきた、旧満蒙開拓青少年義勇軍隊出身の若者たち¹⁵⁾。

青年隊は通称で、必ずしもハルピン街内に居住せず、ここで商売をしたわけでもない。当初の50名が最大で、間もなく十数名となり、ハルピン街解体期には数名に減少していた模様である。住宅建設作業などにも従事したが、公的機関をも威圧する側面をもち、彼らを恐れる住民もいた。

次のVIで触れるが、リーダー高井勇を中心とする中核グループは、1949年頃までハルピン街で強い指導性を発揮できた。一般グループの引揚者がおおむねこれに従った理由の第一は、高井が窮乏きった彼らにハルピン街の住居を提供し、北満地区引揚民更生社に加入させ、受け取った政府の引揚者用配給物資（飲食物・衣料）の一部をヤミ販売させて現金をもたらしたこと。そして第二に、高井が内部規律維持の実力行使をいとわない「青年隊」グループの支持を得ていたことにあった。

2. 引揚者リーダーとしての高井勇

1946年末の開業当初、ハルピン街の営業内容は飲食中心で他の多くのヤミ市と変わるところはなく、ただ、満州引揚民の集住であった点に特徴があった。大河内一男による同時代（1950年）の分析によると¹⁶⁾、引揚者によるヤミ市はよくみられた。その特徴は「海外で指導的な地位に在った者を中心に、組織的に連絡を取り、団結して事業を営む者が多い。所によっては、そうした団結により引揚者だけの露店乃至マーケットを営んで、指導者達が大量に仕入れを行い、出店者に販売をさせ」たところにあるという。岐阜ハルピン街ヤミ市は、大河内のいう典型的な引揚者ヤミ市で、その集団行動の先頭には常に高井勇がいた。彼はヤミ市リーダーである前に、引揚者リーダーであった。

高井勇は、岐阜市木田の出身である。東京の獣医学校を出た後に召集されて満州にわたり、除隊後、哈爾濱市役所にいたときに終戦を迎えた。その後、同市に設立された岐阜県人会（引揚の受け皿）で活躍し、この折に哈爾濱に逃れてきた青少年義勇軍の岐阜出身者の世話をしたという。この縁があって、高井は彼らを岐阜に帯同したとされる¹⁷⁾。

1947年11月のハルピン街建設以降、1950年末の2度目の逮捕で失脚するまでの間、高井勇は強烈な個性と突破力をもとにこの街に君臨し続けた。先述した立上げ時の不法伐採、また公文書の書き換えなど、大胆で法をものともしないエピソードは枚挙にいとまがない。戦争犠牲者である引揚者には特別の権利がある、という信念に基づくこのような行動は、やがて司直の摘発を受け、公判中の発狂という悲劇的な結末を迎えることとなった。

IV 高井勇の構想と主張

1. 引揚者の組織化

高井勇の行動はきわめて大胆で傍若無人なものに見えるが、しかし衝動的なものは意外に少なく、むしろ計画的であった。

高井勇は、1946(昭和21)年8月、青年隊約50名とともに旧満州国哈爾濱から日本に引揚げた（年表-A）。隊員であった大橋和男によると、出発の際、高井は彼らに対し「内地に行ったら、むしろと事業をやる」（下線筆者）と呼びかけたという。そして持ち出し制限を避けるため、彼らに、自己資金

50,000円を、分散して託した。10月20日、1週間遅れで岐阜駅に到着した彼らは、約束どおり成功報酬（半額）を差し引いて高井に渡し、「その金が実際問題として、（翌11月）ハルピン街をこさえるのに一番の軍資金になったという」¹⁸⁾。

側近的存在であった川村一正もまた、高井勇が岐阜に引揚げた際に青少年義勇軍の青少年（18歳くらい）たちをともなったのは、きっと何かに役立てるためであったろうと述べる¹⁹⁾。

農家の二男・三男が中心の彼らには帰国後も居場所もないため、高井氏の家に転がり込み、彼の手足となって働いていた…高井氏は、行動隊として彼らを使った。一緒につれて帰ってきたのも、その辺の含みがあったかと思う。（下線筆者）

高井勇のこの計画性は、1946年10月13日に岐阜に引揚げたからの、迅速で無駄のない行動からも裏付けられる。年表-Aを見ると、10月20日に青年隊を迎えた（そして資金25,000円を手にした）時点から、わずかひと月後の11月26日までに、青年隊を使った金華山の木材盗伐、岐阜駅前広場の不法占拠、そしてハルピン街のバラックの完成、と3つもの成果をあげている。

このうち駅前広場占拠については、ヤミ市の開設プランを秘めて、事前に青年隊を岐阜県庁厚生課に派遣して「暴れさせ」、「野菜直売を名目にテント」を借り出して、駅前広場で実際に設営・販売し、バラックを建てる段取りをつけていた²⁰⁾。

さらにハルピン街バラック竣工の3日後、1946年11月29日には、岐阜市公会堂でハルピン引揚者大会を開くとともに「北満地区引揚民更生社」を結成した。そして12月8日までに、おそらく商材を調達して、ハルピン街の入居者たちにヤミ市をスタートさせている。帰国後わずか2月間の間のこのような活動はまさしく息つく暇もなく、事前の入念な計画がなければ到底なし得ることではない。

おそらく1946年8月の引揚げ以前の段階で、高井勇は日本内地の経済的混乱が衣食住の経済統制を招いたことを熟知していた。食糧難を知りながら敢えて若者たちを帯同し、直ちに、ハルピン街住宅の建設作業に投入した。高井のプランは、資金の国内持ち込みとあわせ、彼らの労働力の活用にあったのだろう。

また、そうして建てられたハルピン街のバラック

住宅には、金がなくても労力を出せばよいとのスローガンに誘われて、満州や朝鮮などの引揚者や復員組が迎え入れられた。彼らは同時に、高井勇の「更生社」の社員となってこの引揚者共同体に配給衣料を呼び込む源となり、そのようにして蓄積された配給物資がヤミ市取引の商材となっていった²¹⁾。

ハルピン街住宅の建設は、高井勇にとって引揚者組織化のための一つの手段であり、さらに、この組織化を通じて戦後日本社会に引揚者らの足場を築く先頭に立つところであったと思われる。

「彼の本心は、やはり、政治を狙っていたんだろうと思うんです。衆議院を狙っていた」。側近であった川村一正はそう証言している²²⁾。

2. 高井勇の主張—戦争犠牲者としての引揚者

一連の県庁など公的機関との交渉において、高井勇は、引揚者が国策の犠牲者であり、団結しなければならないことを強調し続けた。これが彼の大胆な行動の基底にあったことは、疑いない。

1946年11月29日の岐阜市公会堂における高井勇の演説は次のように記録されている²³⁾。ここには、その直前に金華山国有林を盗伐した根拠も高らかに宣言されていた。

我々はスカンピンで帰ってきた。金も持っていないし何もない。しかし、生活しなくちゃならない。それには何をやるべきか。とにかく、裸の者が集まって、力を合わせることによって、何か仕事ができるのではないか。焼け跡の釘を集めても、雨露を凌ぐ小屋はできる。国有林は国の物であると同時に、非常の際のために国が備蓄してきたものである。この時にこそ、この資源は開放されるべきである。（下線筆者）

また例えば、岐阜駅前広場占拠に絡んで、「青年隊」員が岐阜県庁職員を恫喝する授けたセリフは、「右も左もわからん少年を満州だと送り出しやがって、俺らは戦争に負けて帰ってきた。国はどうしてくれるんだ」であったという²⁴⁾。彼らの本音でもあり、また、わずか数年前には少年たちを送り出す側にいた地方政府官僚の琴線に触れる言葉でもあった。なかには協力を申し出る役人もおり、高井勇はむろん、彼らを有効に活用した。

以上、岐阜帰着以降の高井勇の行動は、事前に得た情報をもとに、入念に練られた計画に基づいたものだったと考えざるを得ない。国策の失敗の結果無

一物になった引揚者が、社会的混乱と窮乏のさなかにある日本に、さらに放り込まれることの結果は、想像を絶するものであったろう。公的機関を含む内地の人々が、引揚者＝戦争犠牲者という高井の主張に対抗し得ない段階、少なくとも1946年末の時点で、高井らハルピン街住人の主張は、県庁や警察に対して一定の説得力をもっていた。

そして高井勇の構想は、駅前ハルピン街を梃子とする程度の引揚者の組織化にとどまらず、さらに大きな方向に広がっていった。

V 住宅開発の本格化と拡大

年表-A・D(1947(昭和22)年以降)からは、高井勇の、住宅開発への強い意志と計画性が見てとれる。1946年11月末の開設当初から、次々とハルピン街に入居してくる住民たちは、高井をリーダーとする引揚者組織に属したがゆえに、彼が次々と繰り出すディベロパー業務に関わられることとなった²⁵⁾。

1. 住宅開発の拡大 大ハルピン街住宅

岐阜駅前ハルピン街ができて3か月半ほどたった翌1947年3月14日、高井勇は、岐阜市公会堂において再び住宅建設＝大ハルピン街建設計画を発表した。

これはハルピン街で実践した住宅建設の拡大版で、ハルピン街のようなバラックのレベルをはるかに越えていた。内容を詳述すると、ハルピン街から北西へ約500メートル離れた同市日ノ本町一帯の共同毛織の工場跡地((注26)参照)に、木造2階建て8軒長屋3,000戸の共同住宅を建設する。ハルピン街のバラックとは違う本格的住宅であり、炊事場と便所は共同だが、各戸とも1階に店舗と4畳半、2階に4畳半と6畳、押入をもつ。この建設のために大ハルピン街住宅建設組合を設立し、「1戸当たり3,000円の保証金と勤労奉仕」によって建設しようというものであった²⁶⁾。

さらに、完成目標を1948年とする第二期工事計画ではホテル、総合病院、図書館、児童科学館、映画館、体育館など文化施設の建設も予定された²⁷⁾。高井勇らのこうした構想は、たんなる住宅建設の域を超えており、ある意味で県や市などの官製都市復興プランに対抗する、引揚者による下からの都市復

興プランであった。このヒントは、あるいは旧満州の雄大な都市計画に求められるのかもしれない。

大ハルピン街の建設は、1947年5月頃から始められ、その後の数カ月で、まず約140戸分の長屋(1棟は木造2階建て8~10戸)が完成したとみられる(写真参照)。作業はまず、焼け崩れた工場のコンクリート壁や、織機を固定した基礎コンクリート、レンガ壁の撤去から始められた。「撤去するのに、ずいぶん苦勞した。レンガ壁のレンガは、勤労奉仕に出た入居者たちがコンクリート片を取り除き、それぞれの家の基礎に利用」した²⁸⁾。

写真 建設中の大ハルピン街と子供たち



入居者の子供たちがラジオ体操をする背景に、建設中の大ハルピン街が見える。用材が各所に山積みされている。手前左後ろ向きの女性は、指導中の高井勇夫人。男子の中に、後の2代目経営者を多く含む。(1948年頃か。可知定雄氏提供)

岐阜モデルの県外展開：東京、名古屋、瀬戸

しかも、この大ハルピン街建設の途上で、高井勇は新たな、そしてさらに雄大な住宅開発構想を首都・東京などで推進し始めた。1948年1月19日、彼は東京の日比谷公会堂で「住宅獲得大会」を開催した(年表-D)。そこで発表した計画は、東京の住宅難を当て込んで、岐阜で進めつつあったのと同様の方式(住宅組合を作って会員を募り、住宅を建設して入居させるというもの)であった。

この岐阜モデルの住宅開発は、東京の新橋や赤羽ですすめられ、高井勇側近＝ハルピン街中核グループが派遣されて情報を収集した。東京以外では、大ハルピン街とともに名古屋や瀬戸での建設計画があり、ハルピン街幹部がそれぞれ担当した。先の川村一正は名古屋の担当として栄町で募集をかけ、20数戸を建設して実際に入居させたという²⁹⁾。

2. ハルピン街資源の流用：資金と労働力

大ハルピン街に東京等への進出、高井勇の推進するこうした大規模プロジェクトが、うたい文句にあ

るとおりの僅かな申込者保証金と労働提供でまかなえたはずはない。ディベロパー事業には、公的な住宅貸付とともに³⁰⁾、バラックに住む駅前ハルピン街住民の労働と、ヤミ衣料取引の収益が振り向けられていた。

例えば、大ハルピン街の本格住宅に入居できようと思えば、資金と労働の提供が求められた。年表-B(1948年)のようにハルピン街ヤミ市の衣料営業は繁盛し始めていたから、リーダーからのこうした要請は住民の商売にはマイナスとなったろう。川村一正は次のように証言する³¹⁾。

建設現場の勤労奉仕では、毎日、200名ほどの加入者が建物を造るためのいろいろな作業をした。大ハルピン街への新たな入居者だけでなく、ハルピン街住民も活用された。

駅前ハルピン街で商売をやっている住民は…
でき上がった商品を持って男が行商に出ていく
ので…(やむを得ず)縫製加工を(他所に)頼
んでおいたり…残った者が住宅建設の応援に行
った。(下線筆者)

ハルピン街のヤミ営業の利益は、岐阜県外の住宅建設、例えば東京などの建設資金にさえ充てられた³²⁾。それどころか建設作業についても、東京の住宅組合員となることはあり得ない岐阜のハルピン街住民が動員された。初期からの住民で当時22歳前後であった神田史郎は、次のとおり証言する³³⁾。

高井の親分、本当に開発がすごかった。東京まで行ってどうかこうとか一岐阜に住宅(大ハルピン街)作るで、名古屋行って会員募集して来いって一高井さんの命令で一週間ぐらい街頭(松坂屋前)に並んだ覚えもある。「住宅を造るから、(大)ハルピン街を作るから来てくれ」というようなことで一通る人に説明した。

同じく草分けのNof(女性)の証言も、東京への動員を含め、建設作業の苦勞を語っている³⁴⁾。

金華山の木を切って駅前にバラックを建てる時は、私どもも手伝いました。無断で切っていたとまでは知らなかったが…新橋(のモデル住宅建設)にも行きました。…(西間屋町の引揚者更生住宅の時も)二階建てのしっかりした家を作るのを手伝いました。泥を練って壁を塗るのに、もう本当に大変でした。

岐阜以外の住宅建設事業にさえも、岐阜駅前ハルピン街の利益が投じられ、ハルピン街住民の労働力

が動員されるという、まさにハルピン街あげての大事業であった。逆に解釈するならば、高井勇にとっては引揚以前から、大規模住宅開発の方が目的であったのかもしれない。先述の高井の計画性から見て、駅前ハルピン街の拡張と入居者の誘導は、ヤミ取引量の増大によって、住宅開発の資金と労働力を確保するための手段であった可能性を否定できない。

VI ハルピン街住民と住宅開発：引揚者集団の変容

1. 衣料取引の隆盛と不満の醸成

ハルピン街住民たちにとって、1947年7月の「古着商」=衣料取引への集団転業はあくまで、引揚者リーダー高井勇の指示によるものであった(年表-A・B)。しかし結果として、衣料取引が順調に拡大する中で、例えば「一尺祭り」(札束を拝む)などしだいに生活にゆとりが出てくると、一層この取引にまい進するようになっていった(年表-B, 1948年)。とうぜん彼らは、リーダーがいつまでも、衣料取引とは無縁のしかも県外の住宅開発に没頭し、あまつさえ資金の供出や労働提供を強要して自分たちの営業を妨げる姿に、幻滅するようになっていったと思われる。

このような過程を経て、高井勇は権力基盤であったハルピン街住民の信任をしだいに失っていく。あるハルピン街草分けは、次のように述懐する³⁵⁾。

高井さんが(大ハルピン街に)「3,000円で家が建つ」ということをいったので、私たちは2軒分の家を申し込んだから6,000円払ったんです。最初に申し込んだ何人かは、実際に家を手にしたんですよ。その人たちは、いい思いをしたですわね。それで労働力は(勤労奉仕だから)無料でしょ。労働力は一銭もいらんいんですから、木は金華山から切ってくるでしょ、これもタダですから。

私たちの申込金はちっとも返ってこず、どこへ行ったやら…。しかし、誰もが働くことに一所懸命で「3,000円返せ」と文句をいう人はひとりもいませんし、そんなことを考えているヒマもありませんでした。私たちが出したお金は、どう使ったのでしょうかね。そのような説明は何もありません。ただ、いわれるとおりに動いただけです。誰もがみな、知らないでやったので

はないですか。

金華山の木を伐採したりしたでしょ。あれは泥棒ですよ。私たちも、毎日毎日伐採に駆り出された。みんな無償で働きました。伐採はハルピン街住民にとって強制労働です。「おまえのところから何人出せ」と指示されて、伐採に出かけました。人手を出せないところは、お金を出しましたよ。

嫁さんが食べ物屋をやっている〇〇さんでは、人がいなかったのでお父さんが伐採に参加し、木の下敷きになって亡くなりました。皆で葬式をしましたが、やられ損ですね。気の毒なことです（下線筆者）。

このように、ハルピン街住民の草分けの中にさえ、大ハルピン街建設に資金供出と労働力提供を強制され、何ら見返りが得られないことに不満を感じる者が始まっていた。先述のとおり（年表-C）、ハルピン街の戸数は増加し続けていたが、新たに加入した者はなお一層、見返りなしの資金や労働提供を重荷に感じたはずである。

この傾向に、1949年頃からの統制緩和は拍車をかけたであろう。何故ならば、商品流通が自由になるにつれて、ハルピン街住民が敢えてヤミで取引する必要は低下する。つまり、更生会員として配給された引揚者用更生物資をさらに横流しする意味は薄れてくるからである。

2. 青年隊による強制

青年隊は、1946年の駅前ハルピン街開設以降、高井勇の期待どおりおおむね良く機能し、ハルピン街のバラック建設などの際によく働いた。しかし、元青年隊員の大橋和男によると、ハルピン街が「200」（100の誤りか）戸を超える1948年頃、彼らは建設の手伝いから遠ざかっていたという。この時期になると、青年隊の人数が減ると反比例してハルピン街住民が増加し、彼ら住民が割当てられて大ハルピン街や県外の住宅建設に動員されたため、青年隊が実働する機会は少なくなっていたのだろう。

それ故、先の大橋和男の、「高井さんは、私に仕事を手伝えとはいわなかった。青年隊を大事にしましたわ」との証言が生れる。しかし、大事にされた彼らに残された仕事の中には、指示に従わないハルピン街住民への制裁が含まれていた³⁶⁾。

「今日は何々の仕事にみんな出るように」っ

ていったけど、ある人間が出なんだの。（それで）明るくなる日になって、「てめえは何で昨日出なんだんや」といったら、ああでもないこうでもないっていうで、「お前ら商売をやりがてらああでもないこうでもないっていうのなら、焼きを入れてやる」…木刀を持って追いかけて……それで派出所（留置場？）に入れられた。

ハルピン街住民であった神田史郎（当時22歳前後）の証言もこれを裏付ける³⁷⁾。

青年隊は私と同じ年代の5、6人の若者です。私は（店の）オーナーなんですけど、彼らは義勇軍で満州へ行っとった。…親分の高井さんの守り役みたいなもんで、文句をいう奴がおったら殴りに行くんです。うかつに高井さんに声かけに行ったら「何じゃ、出てこい」ってなもんで（下線筆者）

このように、ハルピン街住民＝引揚者は、自身のための住居建設（ハルピン街のバラック。大ハルピン街の本格建築の一部）はもちろん、やがて、東京を含む遠方への出張と労働、金銭提供を引揚者リーダー＝高井進によって求められた。これらを忌避する場合には、青年隊による暴力を覚悟しなければならなかった。この意味で、青年隊はまさしく高井の親衛隊であり、暴力装置であった。

大ハルピン街や岐阜県外の住宅建設への動員は、ハルピン街住民にとっては、経済的行為というよりは引揚者組織のヒエラルキーに基づく経済外的な強制であり、この経済外的行為の背景には常に、青年隊という暴力装置の影が付きまとっていた。花登筐の『問屋町の女』は、岐阜市の繊維問屋町の3人（一説に4人）の女性経営者の戦後をモデルにした小説であるが、その中に登場する高井勇らしき人物は、粗暴で卑賤な権力者として描かれるに過ぎない³⁸⁾。

VI 「建設会」と高井勇の失脚

1. 「建設会」メンバーによる高井勇の評価

1950（昭和25）年、岐阜駅前ハルピン街の中で、越中谷利一（元プロレタリア作家で地元業界紙『東海繊維経済新聞』社長）、高木保郎（後に岐阜問屋町連合会長）らによって、「建設会」という組織の結成が、おそらくは密かにすすめられていた。

この組織は、高井勇が失脚した後の1951年4月

頃、「岐阜問屋町建設連合会」として姿をあらわす。連合会はやがて、当時の岐阜市の衣料業者の結集に成功し、衣料取引をさらに隆盛に向かわせるいっぽう、北海道をはじめとする各地から同業者を吸収しつつ商圈を拡大し、1970年代にはわが国第三位のアパレル産地として盛名を獲得する母体となった。「建設会」結成の経緯について詳細はいまだ明らかではないが、ハルピン街住民の高井勇による住宅開発への動員に対する反発や不満が背景にあったことは疑いない。

越中谷利一は、自らの新聞社が出版した問屋町の20年記念誌で、やや冷やかに、次のように述べている³⁹⁾。

高井(勇)さんは現在の姿の問屋町とは直接関係はない。しかし間接的には大いに関係がある。高井さんは人も知る問屋町の礎を築いた大功労者ではあるが、一面当時としては最大の障害であった。

岐阜駅前のブラックマーケット(ハルピン街)はがんばること5年の後、現在の西問屋町、呉服通り一帯に移転した。たしか149戸だったと覚えている。そこまでは高井勇さんのいってみれば支配下であった。その高井さんには大きな抱負があったが、商業地区としての地固めよりも、外延的、政治的な野心といった傾向が著しかった。したがってその団結ぶりもかなりファッション的色彩が濃厚であった。恐いというのはその点であった。

高木保郎さんを主軸とした建設会というものが生まれたのは、それを避けるためであったといっても過言ではない(下線筆者)。

上記の越中谷の証言から、次の二点が明らかとなる。

- ① 「建設会」は、「商業地区」としての発展をめざすハルピン街住民による組織であった。
- ② 彼らは、それまでの高井勇の指導が「外延的、政治的な野心」による「ファッション的」なもので、「商業地区」をめざす方向にとって「障害」になるととらえていた。

付言すると、建設会の設立メンバーはそのまま、後のアパレル産地化の要となる岐阜問屋町連合会のリーダー、およびそのスポークスマンである地元業界紙の重鎮となった。

2. 高井勇の失脚とハルピン街の関係変化

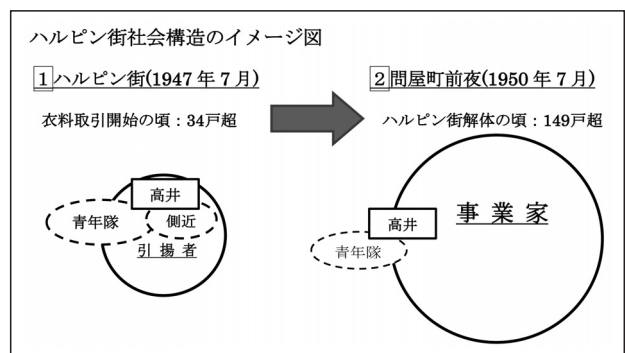
越中谷利一らによる新組織の設計が着々と進んでいたであろう1950年10月、彼らの「障害」である高井勇は公文書偽造、臨時物資需給調整法違反等の疑いで岐阜市警の捜査を受け、翌11月に起訴された(年表-Aを参照)。

2年ほど前の1948年11月にも、高井勇は一度逮捕されたことがある。しかしこの時、高井側近の幹部たちだけでなく、多くのハルピン街住民が釈放の嘆願に協力し⁴⁰⁾、司法当局も高井の拘束を解いて釈放した。

しかしそれから2年を経た1950年末の時点において、もはやハルピン街住民を挙げた高井勇釈放の嘆願はなく、司法当局もまた公判を躊躇することはなかったが、当時の担当検事であった近藤康三は、高井の逮捕が司法の積極的行為ではなく、むしろハルピン街の「仲間割れ」にあったと証言する⁴¹⁾。

ヤミの取り締まりは本来警察の仕事で、検察が乗り出す事件ではなかった。高井勇氏とトラブルを起こした仲間が高井氏を横領罪で告訴してきた。捜査するうち各事件の全容が分かり、起訴した。事件の内実は仲間割れだった(下線筆者)。

次掲のイメージ図は、この間のハルピン街住民の社会構造の変化を示したものである。



1947年7月、①の時点において、貧しく数も少なかった駅前ハルピン街の引揚者は、住居と仕事を与えてくれ、引揚者用物資受入れ団体の長であって、かつ「青年隊」をバックとする高井勇のいかなる指示にも、従わざるを得なかったであろう。この頃のハルピン街の本質は、あくまで、か弱い引揚者集団が、貧しさゆえに集住せざるを得ない場であった。

しかし②の1950年7月のハルピン街の解体・移転に先じて、おそらく1949年の経済統制緩和の頃から、ハルピン街引揚者は衣料取引に自信をもち

はじめていた。彼らは事業家として、将来、統制が解除されてヤミ商売としてのうま味がなくなっても、引き続きこの取引を追求しようとする意欲に満ち、実際にそう行動した（年表-B, 1950年）。

おそらく1949～1950年頃になると、リーダーによる様々な住宅開発事業への動員等は、彼らの衣料取引にとって障害以外の何物でもなくなっていた。彼らはもはや、集住することでようやく日々の糧を得る引揚者集団ではなく、衣料取引にまい進する意欲にあふれた事業家の集団に変容しつつあった。これを、引揚者リーダー高井勇は見落としていた。

反高井勇派の高木保郎らによる1951年春の「岐阜問屋町建設会」結成は、ハルピン街の社会構造の変容を象徴し、ハルピン街という閉鎖的引揚者集団によるヤミ商売から、正規の衣料取引を営む開放的事業家集団への転化を、高らかに宣言するものであった。

1951年以後、岐阜問屋町連合会に結集した彼らは、もはやヤミ商人ではなく、本物の事業家集団として取引を全国に拡大し、また全国の人材を岐阜に吸収してさらに膨れ上がり、ついに1970年代には、既製服卸問屋数1,500、縫製業者数4,000を擁する全国第三位のアパレル産地としての地位を確立するに至る。

おわりに

第二次大戦後の岐阜市では、駅前ヤミ市ハルピン街に集住する引揚者集団（住民にしてヤミ商人）によって県内・外で大規模な住宅開発（ディベロパー）事業が推進された。これは、政府の失策によって混乱する内地に帰還せざるを得なくなった引揚者自らが、政府のなすべき事業＝住宅建設をいわば代行した、稀有の例であった。

しかし、この大規模な住宅開発は、引揚者リーダーであり庇護者である高井勇の独断によるものであり、彼の支配下にあるハルピン街にあって、引揚者は資金と労働力を提供せざるを得なかった。

いっぽう、同じく高井勇によって与えられた衣料ヤミ取引は、当初、引揚者にとって生存のための生業（なりわい）に過ぎなかったが、やがて取引が成功するにつれて彼らに大きな自信を与えた。取引の面白みに目覚め自律的経営を指向し始めた彼らにとって、高井による住宅建設への動員は大きな障害となっ

ていた。

1950（昭和25）年、経済統制が撤廃されてハルピン街住宅が解体・移転されたこの年末に、高井勇は失脚した。リーダーの交代は、高井を頂点とする閉鎖的・専制的な引揚者集団の解体と、新たなリーダーによるより開放的集団の誕生を象徴していた。1946年当時、ハルピン街ヤミ市内部のメカニズムは、社会の混乱に照応した生存欲求充足のための生業と住居の確保にあった。しかし1950年の時点で、彼らの欲求は衣料取引の追求を通じた自己実現へと変化していた。

この1950年、リーダー＝高井勇の桎梏から解放された引揚者集団は事業家集団に変容し、本格的な衣料取引へと歩み始めた。これにより、岐阜駅前ハルピン街に集った引揚者はようやく、内地に足場を築くことに成功した。これこそが彼ら引揚者の母国である日本への定着、あるいは母国による引揚者の再統合の過程にほかならない。後のアパレル産地化につながる道は、ここに開かれることとなった。

注

- 1) 「消滅する市町村」『中央公論』2014年6月号、中央公論社、参照。
- 2) 橘川武郎「日本における産業集積研究の到達点とその可能性」『経営史学』36-3号、2001、ほか。なお、拙稿（丸山幸太郎と共著）「岐阜市の戦後復興とアパレル産地形成」『地域文化研究』32号、岐阜女子大学、2015、参照。
- 3) 何らかの経緯である安定した均衡状態（ナッシュ均衡）がもたらされた場合、仮にそれが想定する他の均衡よりパレート劣位であっても継続され得る（岡崎哲二『コアテキスト経済史』新生社、2005年、p25）。
- 4) 米川伸一『経営史』有斐閣、1977年。白井聡『永続敗戦論』太田出版、2013年。
- 5) 「満州」（満州国および関東州）にはこの半数にあたる150万人が居住していたと推定される（山本有造編著『満洲 記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年、p4）。
- 6) 蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動』勉誠出版、2011年。例えば、引揚者の戦後の定着過程について社会史的にとらえたものに島村恭則編『引揚者の戦後』新曜社、2013年、がある。
- 7) 拙稿「戦後経済統制と岐阜ハルピン街 - 「古

着商」への転換をめぐる」(拙著『岐阜アパレル産地の形成』成文堂、2003年)。

なお、「ハルピン街」という名称は、初期の構成メンバーに旧満洲国哈爾濱(ハルビン)経由の引揚者が多かったことによる。

- 8) 吉田裕「日本近代史研究とオーラルヒストリー」(『オーラルヒストリーと体験史』青木書店、1988年、p79)。P.トンプソン『記憶から歴史へ』青木書店、2002年。
- 9) 前掲『岐阜アパレル産地の形成』。
- 10) 東海繊維経済新聞(三次義之)『岐阜既製服産業発展史』岐阜既製服産業連合会、1975年。前掲『岐阜アパレル産地の形成』。
- 11) 前掲「戦後経済統制と岐阜ハルピン街」
- 12) 『岐阜県史通史編』近代下、1972年、p.878。
- 13) 岐阜県厚生課「引揚者へ当住宅用資材配給申請に就いて 案一」教育民生部長より経済部長宛、21厚生第1014号、昭和21年12月2日(『引揚者収容関係書類綴』2冊の1、厚生課、1947年)。
- 14) 前掲『岐阜アパレル産地の形成』、とくに終章。
- 15) 彼ら(50数名)が高井勇に従った理由は、敗戦後まったく頼りがいのなくなった栗田中隊長に代わって満洲で彼らの面倒を見てくれたのが高井夫妻だったからである(大橋和男ヒアリング記録、2002年2月18日。前掲『岐阜アパレル産地の形成』p225・231)。
- 16) 大河内一男編『戦後社会の実態分析』日本評論社、1950年、p225。なお、戦後統制が1945年末から強化されると、これに対応して日本全国の主要駅周辺で多くのヤミ市がにぎわい始めた。ちょうど1年後、岐阜駅前ハルピン街が建設された1946年末は、ヤミ物価の暴騰が社会不安をあい、労働側が賃金引上げを求めて二・一ストへと高揚しつつある時期であった。
- 17) 前掲『岐阜アパレル産地の形成』、pp.226-231。
- 18) 前掲大橋和男ヒアリング記録、2002年2月18日。同じく浅野昭の証言では、この金は「ノコギリや鎌を買ったりちょっとした小道具を買って金華山の木を切った」りするのにあてられた(浅野昭ヒアリング記録、2002年1月29日。前掲『岐阜アパレル産地の形成』p225・231)。

なお、青年隊の人数については、50名(元青年隊の大橋和夫)から5、6人(ハルピン街住民の神田史郎)まで証言者によってばらつきがある

(神田史郎ヒアリング記録①、2007年1月19日)。岐阜駅で高井勇に出迎えられたのは50人であったとしても、その時に岐阜に留まった10数人が高井宅およびハルピン街(周辺)に分散して高井に協力し、やがて社会が安定するとともに減少して、1950年7月のハルピン街解体時には5名程度になったと推定する。

- 19) 川村一正「岐阜繊維の誕生とハルピン街」p20(前掲『岐阜アパレル産地の形成』)。
 - 20) 前掲大橋和男ヒアリング記録(前掲『岐阜アパレル産地の形成』p232)。
 - 21) 前掲「戦後経済統制と岐阜ハルピン街」
 - 22) 川村一正ヒアリング記録、2001年11月27日。
 - 23) 前掲川村一正「岐阜繊維の誕生とハルピン街」p18。
 - 24) 前掲大橋和男ヒアリング記録(前掲『岐阜アパレル産地の形成』p232)。なお、1947年と1950年の高井勇逮捕時には、関連して複数の県庁職員が拘束されている。
 - 25) ディベロパーは開発業者のこと。2015年現在では、大規模な宅地造成やリゾートマンション分譲とともに、オフィスビルの建設やマンション分譲、再開発などの事業の主体となる団体・企業をさす。
 - 26) 岐阜新聞「終戦から半世紀岐阜の軌跡」1994年8月24日・30日。彼が設立した「大ハルピン街住宅組合」の目的は、「家なき者が協力して自分で住宅を建設し、かつ経済的基盤の弱い者が大同団結して生活の再建を図ること」にあり、「住宅の所有権を共有とし、組合財産の分配を平等」とするなどがうたわれていた(中日新聞「ハルピン街物語岐阜アパレル40年」1986年1月21日)。
- なお、ハルピン街と大ハルピン街の位置関係は次のとおりである(前掲『岐阜アパレル産地の形成』p234所載図に加筆)。

ハルピン街から大ハルピン街へ



- 27) 東海繊維経済新聞『岐阜既製服産業発展史』1975年, p17。
- 28) 岐阜新聞「終戦から半世紀岐阜の軌跡」1994年8月24日・25日。
- 29) 前掲川村一正「岐阜繊維の誕生とハルピン街」(前掲『岐阜アパレル産地の形成』) p35。
- 30) 高井勇は、例えば真砂町の404戸の申請を「大ハルピン街住宅組合 組合長」として行っており、1948年11月には、この肩書に伴う罪状が逮捕の理由となった。
「越冬緊急住宅施設国庫補助追申ハルピン街」岐阜県知事より厚生省社会局長宛, 32厚 1141号, 昭和22年12月4日」(注13)と同冊に所収。
「越冬緊急住宅助成金申請書
一所在地 岐阜市真砂町12丁目
一戸数 404戸
一坪数 1戸7坪5 総坪数3030坪
一建設費 1戸5000円 総計約202万円
一資材 全部手持
一収容人員 1820名
右は引揚者, 復員者, 遺家族, 戦災者のために越冬緊急住宅として使用致すものに付助成金交付下されたくこの段申請致します
昭和22年12月1日
大ハルピン街住宅組合組合長 高井勇
岐阜県知事武藤嘉門殿」
- 31) 前掲川村一正「岐阜繊維の誕生とハルピン街」pp.32-33, p36。
- 32) 国からの15万円については不明だが、引揚者向け更生住宅資金をさす可能性がある。
- 33) 神田史郎ヒアリング記録①, 2007年1月19日, 筆者実施。同②, 2002年1月24日・3月8日, 荻久保嘉章実施(前掲『岐阜アパレル産地の形成』p225・231, 241)。
- 34) Nof ヒアリング記録, ①2009年6月10日, 同②同年1月30日, 同③2011年7月2日, 筆者実施。
- 35) 廣瀬つた子ヒアリング記録, 2001年3月13日～9月7日に5回荻久保嘉章実施(前掲『岐阜アパレル産地の形成』)。
- 36) 前掲大橋和男ヒアリング記録, 2002年2月18日。浅野昭ヒアリング記録, 2002年1月29日, (前掲『岐阜アパレル産地の形成』p225・231, 241)。
- 37) 前掲神田史郎ヒアリング記録①, 2002年1月24日・3月8日(前掲『岐阜アパレル産地の形成』p225・231・241)。
- 38) 花登筐『問屋町の女』上・下, 集英社, 1983年
- 39) 三次義之編『問屋町の歩み 岐阜産地の人々』東海繊維経済新聞, 1971年, pp.14-15。
- 40) 川村一正寄贈「ハルピン街」1~4, 岐阜県図書館所蔵。
- 41) 岐阜新聞「終戦から半世紀岐阜の軌跡」1994年9月4日。

文献一覧(執筆者50音順)

- 浅野昭ヒアリング記録, 2002年1月29日荻久保嘉章実施(根岸2003年所収)。
- 蘭信三編, 『帝国崩壊とひとの再移動』, 勉誠出版, 2011年。
- 大河内一男編, 『戦後社会の実態分析』, 日本評論社, 1950年。
- 大橋和男ヒアリング記録, 2002年2月18日荻久保嘉章実施(根岸2003)。
- 岡崎哲二, 『コアテキスト経済史』, 新生社, 2005年。
- 川村一正(寄贈), 年不詳:「ハルピン街」1~4, 岐阜県図書館所蔵。
- 川村一正ヒアリング記録, 2001年11月27日根岸秀行・荻久保嘉章実施。
- 川村一正, 「岐阜繊維の誕生とハルピン街」(根岸2003年)。
- 神田史郎ヒアリング記録①, 2002年1月24日・3月8日荻久保嘉章実施(根岸2003, p225・231・241)。
- 神田史郎ヒアリング記録②, 2007年1月19日根岸秀行実施。
- 橋川武郎, 「日本における産業集積研究の到達点とその可能性」『経営史学』36-3号, 2001。
- 岐阜県, 「引揚者へ当住宅用資材配給申請に就いて案一」教育民生部長より経済部長宛, 21厚生第1014号, 昭和21年12月2日(『引揚者収容関係書類綴』2冊の1, 厚生課, 1947年, 5・02-S22-2, 岐阜県歴史資料館所蔵)。
- 岐阜県, 岐阜県厚生課「越冬緊急住宅施設国庫補助追申ハルピン街」岐阜県知事より厚生省社会局長宛, 32厚 1141号, 昭和22年12月4日(同上)。
- 岐阜県, 『岐阜県史通史編』近代下, 1972年。

岐阜新聞, 「終戦から半世紀岐阜の軌跡」, 1994年 8月24・25・30日, 9月4日。

島村恭則編, 『引揚者の戦後』, 新曜社, 2013年。

白井聡, 『永続敗戦論』, 太田出版, 2013年。

中央公論社, 「消滅する市町村」『中央公論』, 2014年6月号。

中日新聞, 「ハルピン街物語岐阜アパレル40年」, 1986年1月21日。

東海繊維経済新聞 (三次義之), 『岐阜既製服産業発展史』, 岐阜既製服産業連合会, 1975年。

トンプソン, P, 『記憶から歴史へ』, 青木書店, 2002年。

根岸秀行 (荻久保嘉章と共編著), 『岐阜アパレル産地の形成』, 成文堂, 2003年。

根岸秀行, 「戦後経済統制と岐阜ハルピン街 - 「古着商」への転換をめぐって」, 2003年 (根岸2003)。

根岸秀行 (丸山幸太郎と共著), 「岐阜市の戦後復興とアパレル産地形成」『地域文化研究』32号, 岐阜女子大学, 2015年。

Nof ヒアリング記録, 2009年1月30日・6月10日, 2011年7月2日根岸秀行実施。

花登筐, 『問屋町の女』上・下, 集英社, 1983年。

廣瀬つた子ヒアリング記録, 2001年3月13日～9月7日に5回荻久保嘉章実施 (根岸2003)。

三次義之編, 『問屋町の歩み 岐阜産地の人々』, 東海繊維経済新聞, 1971年。

山本有造編著, 『満洲 記憶と歴史』, 京都大学学術出版会, 2007年。

吉田裕, 「日本近代史研究とオーラルヒストリー」(『オーラルヒストリーと体験史』), 青木書店, 1988年。

米川伸一, 『経営史』, 有斐閣, 1977年。

*本稿は科学技術研究費基盤研究C・課題番号26380424「戦後の地域復興と産業集積の形成をめぐる動態分析—岐阜アパレル産地について」(研究代表者根岸秀行, 研究分担者丸山幸太郎)の成果の一部である。

(2015年10月20日受付)

(2015年12月9日受理)